

彫刻家の吾妻兼治郎さん

「継続の大切さ」訴え

イタリア・ミラノで活躍し、抽象彫刻の第一人者として知られる、吾妻兼治郎さん(87)が、このほど9年ぶりに旅行で帰国。中野区で開かれた芸術家を主な対象とした催しで講演した。尊敬する師に認められるまでのエピソードを披露し、「真剣に仕事に取り組むことこそ大事だ」と強調した。



自らの足跡を語るミラノ在住の彫刻家、吾妻兼治郎氏—中野区

伊から帰国、中野で講演

吾妻さんは、特攻隊員として終戦を迎え、家業が山形市の美術鑄造職人だったこともあって東京芸大に入学。大学院を経て、イタリア政府の給費留学生としてミラノの名門、ブレラ美術学校で、具象彫刻の巨匠、マリノ・マリーニ氏に師事した。

師が教室を訪れると、多くの学生が取り巻いたが、言葉もマスターできなかつた吾妻さんは、黙々と制作に取り組むしかなかった。ある日、マリーニ氏が「みんなしゃべってばかりいないで、あの小さい日本人を見習って仕事しろ」と一喝。語学ができないことが、幸運を呼び寄せた瞬間だった。

その後、アトリエの出入りを特別に許されると、職人の血が流れていたことが奏功して作品の型を取るなどで重宝され、旅行時に家の鍵を預かるまでに信頼を得た。

一方、自分の作品づくりでは、師から「日本人だろ」と、日本人でなければできないことをやれと示唆され、悩む日々が8カ月続いた。石炭も満足に買えず、捨てられた木箱を燃して暖を取る生活の中、ある日、細かい木片が散らばる様子にリズムを発見。石膏で型を取るとたまらないほど美しく、日本人しか把握できないいわび・さびを感じて「はっとした」。これが、ひびやくほみが特徴的な作風の原点となった。

講演後の質疑では、若手芸術家に、「(若いうちは)経済的にもいたたまれないが、自分を見失わないで頑固に続けていけば、日の当たる日が来るだろう」と、継続することの大切さを訴えた。

催しはソプラノ歌手、吉川具仁子さんが今年8月に設立した、若手演奏家のコンサートなどを企画する「レ・プレイアデー」(中野区)が開いた。今後もこうした講演会を開き、芸術家の育成に関わっていく。